

ならコープ・東日本大震災ボランティアバス 陸前高田訪問（理事研修）

ならコープは、「東日本大震災ボランティアバス」、「東日本目的別募金」、「東北支援お手伝いショップ」など、さまざまな復興支援活動に取り組んでいます。2013年3月27日、ならコープの理事たちが視察研修のため支援活動でつながりのある被災地を訪問しました。

●被災地の語り部から説明を

ならコープでは、2012年の4月よりおおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協と合同で東北支援を目的としたボランティアバスを運行してきました（企画名「東日本大震災ボランティアバス企画」）。12年度中で17回バスを出し、ならコープからはのべ186人が参加。主に陸前高田市の上長部（かみおさべ）地区での支援活動を行なってきました。今回の訪問は、被災地において息の長い支援が必要となっていることを受け、現地の実情を把握し今後の災害支援のあり方を考えるため、組合員役員研修として実施されたもので、3日にわたる訪問の最終日取材しました。

3月27日の朝に宿を発ち、最初に向かったのは一般社団法人陸前高田被災地語り部「くぎこ屋」。代表の釘子明さんは陸前高田市の有名ホテル“キャピタルホテル1000”などでホテルマンとして働き今回の震災を経験した方です。避難所へ避難してからは運営を行なう組織づくりにたずさわり、被災者の方々が仮設住宅へと移り住むまでリーダーシップを発揮されたそうです。現在は被災経験を伝える「くぎこ屋」を立ち上げ、語り部として活動されています。ボランティアバスはこの「くぎこ屋」をいつもコースに入れ、訪れています。

「皆さんは組合員の理事などを務める、地域のリーダーにもなり得る方々と聞いております。いつもよりも避難所をどう運営したかなどのお話を多めにしますので、ぜひ地域の防災活動に生かしていただければ」と言って話し始めた釘子さんは、更地に近い陸前高田市内に建てられたプレハブで、テレビとパソコンを使い、当時の写真やビデオ、資料などを映し、その時の経験を伝えました。釘子さんの話に、6人の組合員は熱心に耳を傾けていました。「今回は避難所に避難しながら、津波が押し寄せたために亡くなった方も大勢いました。地域の避難所は本当に安全か？ 皆さんにはそれを先頭に立って確かめてみてほしい」（釘子さん）。最後は「くぎこ屋」のそばにある高台に登り、市内を見渡しながら状況を説明してくださいました。



高台からみる「くぎこ屋」とその周りの風景。
周りの建物はすべて津波で流されてしまった。



「くぎこ屋」の中で釘子さん（右端）から説明を聞く参加者。

●上長部を少しずつ変える

次に一行は長部小学校の牧田仮設団地へ。ここにはいわて生協の移動店舗「にこちゃん号」が訪れていました。移動店舗は全国の生協からの支援で購入されたもので、ならコープも支援を行ないました。

参加者は新鮮な魚介類や野菜、パンやふかし芋などバラエティに富んだ品揃えに驚きながら、職員や買い物をされている方と言葉を交わしていました。

そして上長部地区へ。ここはボランティアバスで陸前高田を訪れた一行が継続的に訪れている地区です。津波で田畑と家屋の2/3が流される大きな被害を受けましたが、多くのボランティア活動もあり、がれきや倉庫から流れ出た水産物の片付けが終わり、最近では簡易木工施設を備えた「長部ふれあい広場」や公民館、スポーツ用のグラウンドなどができ、復興の第一歩を踏み出しています。ボランティアバスで訪れた人々は、そうした施設作りの手伝いや、農地での畑作業を手伝っているとのこと。「毎回短い時間で、ボランティアバス1回でできることは少ない。長い時間をかけて東北を訪れ、普通の農作業をして帰るようなこともある。だけどそれでもいい。その積み重ねが上長部をすこしずつだけ変えているし、見て、聞いて、感じてもらうことが大事です」（ならコープ CSR経営管理 広報担当 沖山 優さん ※取材時の肩書きです）。

皆さんは慰霊碑に手を合わせた後、出来たての公民館（ドイツからの支援で建造）で、現地で活動するスタッフの方に最近の状況を聞きました。木工施設で作業中の地域の方とも積極的にコミュニケーションを図りました。

この訪問を終えると、一行は帰途につき、仙台空港へ。バスの中では、それぞれが感想を述べ合いました。「以前被災地を訪れたときは、その風景に目をとられていました。今回は人と出会い、人と接することができたのが大きかったです」（紙森さん）
「現地の生協の頑張りを強く感じた。自分たちのできる形で応援していきたい」（渡辺さん）
「奈良での今後の活動を話せる仲間ができて本当によかったです」（中野さん）

こうした訪問と一緒に出るのは初めてというメンバーだったそうですが、東北への手助けへの意識は誰もが高かったからか、すっかり意気投合。まるで古くからの友人たちのような皆さんでした。



移動店舗（にこちゃん号）の訪れた牧田仮設団地。



長部ふれあいひろば、奥に簡易木工施設。



塩害で伐採した木や津波で流された木を使い、お椀、お皿などの作品を作成。

また、事務局のならコープ沖山さんと、業務サポートフロア人事総務部の木下健一さんは、「被災地の現状は、少しずつ変わってきている。今日会った方々が5年後、10年後どうなっていくのだろうか？ そういうことを考えながら何が出来るのか。それを考えていきたいと思いました」(沖山さん)、「風景を見るだけでなく、できるだけ現地の人と話をしてもらいたい。仮設住宅の実態を見てもらいたい。そう思って予定を組みました。奈良で過ごしていると、やりたいことがあっても『自己満足ではないか』『本当に求められているのか』と考えてしまいます。でも、こっちで話をしてみると、そう思った取り組みの中にも、被災者から十分求められているものがある。“何でもあり”でやっていきましょう」(木下さん)と今後の活動についてもふれていました。



ドイツからの支援で立て直された上長部地区の公民館。